

日本地理学会秋季学術大会で災害研共催シンポジウムを行いました(2016/10/1)

テーマ：地理学・災害科学・東日本大震災
場所：川内北キャンパス マルチメディアホール

9月30日(金)と10月1日(土)の2日間、東北大学川内北キャンパスにおいて日本地理学会秋季学術大会が開催されました。大会2日目には、災害科学国際研究所に所属するの同学術大会実行委員(今泉俊文教授・遠田晋次教授・岡田真介助教・丹羽雄一助教：いずれも災害理学研究部門)がオーガナイザーとなり、災害研共催シンポジウム「3.11 その時、その後—震災を経験した総合大学による分野横断型災害研究の実践—」を開催しました。本シンポジウムは、一般公開シンポジウムとして開催し、日本地理学会会員だけでなく、一般の方々の来場もあり、多くの方々に聴講して頂けました。

第一部は岡田助教が座長を務め、最初に丹羽助教から本シンポジウムの趣旨説明が行われました。続いて、サッパシー・アナワット准教授(災害リスク研究部門)、蝦名裕一准教授(人間・社会対応研究部門)、佐々木宏之助教(災害医学研究部門)、柴山明寛准教授(情報管理・社会連携部門)による研究発表を行い、津波被害、歴史資料、医療支援活動、アーカイブなどをキーワードとした災害研の若手研究者による多岐にわたる研究成果をアピールしました。

第二部では、遠田教授の司会の元、今泉教授を含む3名の日本地理学会員から第一部の講演や災害研・災害研究に関するコメントがあり、そのコメントを踏まえた4名の講演者によるディスカッションが行われました。地理学を基礎に研究・教育を行う研究者からのコメントとそれに関するディスカッションを通じ、災害研究における地理学の視点のあり方について有意義な議論を行うことができました。



講演するアナワット准教授



パネルディスカッションの様子

文責 丹羽雄一(災害理学研究部門)